## おわりに

### ゆいの会と大切なメンバーたち、その実践のこと

筑紫女学園大学　　稲田　八穂

２００３年に発足した臨床国語教育研究会北九州部会も１０年目を迎えました。難波先生との偶然の出会いから広島の臨床国語教育研究会に参加し、北九州にも会を作ってはということになりました。この会に引きつけられたのは、「教室で起きる出来事を大切にする」というスタンスです。それまでトップダウンの研究会に参加していたときから、胸の奥でくすぶっていたものがはっきりしました。わたしたちは教育をデザインするけれど、それに固執してはいけないのです。教室という場で、あるいはそこから出た場で起きる出来事こそ大切にしなければならないのだということに改めて気付かされました。その思いを共有してくれる数名の仲間と歩み始めました。もちろん、会に所属したからすぐにその力がつくというわけではありません。いつもその目を忘れずに子どもたちに向かうということが大切なのだと思います。

「名前をつけたら」という難波先生のご提案で、悩んだ末「ゆいの会」と命名しました。沖縄の言葉で「結び合う」という意味があります。若手の実践者が多い研究会です。学級経営の悩みや授業作りについて自由に語りながら、教師を結び実践を結んでいます。難波先生から理論的な講話もしていただきます。一昨年からのテーマは「書くこと」でした。「なかなか書く力がつかない」「どう指導したらいいのだろう」という悩みの中、難波先生から「ジャンルを意識する」「指導過程を焦点化する」ことをご指導いただきました。おりしも学習指導要領完全実施、新教科書採択を控えていました。わからないながらも、実践を試みることになったのです。わたし自身は昨年より小学校現場を離れましたので実践はかないませんでしたが、実践者と共に考えていくことにしました。手探りで始めた実践でした。難波先生のご指導でこのような実践集としてまとめることができ、感謝しております。

会員とその実践を紹介します。まだまだ十分な成果とは言えず、まとめ方も不十分ですが、それぞれは確かなものを得ることができたと思います。

### １　東　由美さん「よく見て書こう」〔観察記録文・取材〕

会員としてはニューフェイスです。教員生活６年目を迎え、実践に意欲的です。分からないことがあると納得するまで尋ね、自分のものにしていきます。他の人の実践を自分に置き換えて聞いているのでしょう。自分だったら、自分の実践だったらと考えているようです。時に神髄をついたような質問をします。真摯に取り組むという言葉がぴったりの先生です。

東さんはこの実践で価値目標を明確にして指導することの大切さを改めて学んだようです。わたしたちは「こんな子どもになってほしい」という思いを抱いて指導しています。しかし、はっきり意識していないこともあるでしょう。彼女はこの実践を通して価値目標を意識することの大切さを実感しました。

教科書教材を活用して子どもたちの関心・意欲を高め、取材活動につないでいます。誰に何を知らせるかという課題意識をはっきりさせているので、子どもたちの書く意欲は最後まで持続しています。身体を使って感じることが得意だという特性を生かして、１年生の指導事項以外のものも取りいれ、

五感を使って取材させました。子どもに合った手だてが工夫されています。学習後、学んだ力が生活科の中に生かされたことを発見しています。教科の枠をこえ、子どもの成長を全体像としてとらえられていることがすばらしいです。

## 2　土居　結緯さん「もっと知りたい、友だちのしょうかい文を書こう」〔紹介文・取材〕

採用３年目を迎えた土居さんは、いろんなことを吸収する柔軟性をもっています。いつも控えめに「そんなことないです。」と謙遜しますが、着実に力を付けてきていると思います。自分から進んで話すにはまだ時間がかかるようです。でも、尋ねられると熱い思いを語り始めます。それはいつも子ども目線です。その姿勢で単元作りに向かうことができていると感じました。

実践は、帰りの会の「よいところ見つけ」から入っています。子どもたちの日常から単元設定をしているので、子ども自身の課題となりました。映像を使っていることも工夫の一つです。「よいところ」を言われている友達の表情を思い浮かべ、その上で「もっといいところを探そう」と意欲づけています。取材への意欲が高まってくるはずです。

次に、日常的に書いている「きらきらカード」をもとに、詳しい取材の観点を整理しています。自分たちの書いたものをもとに観点を整理することは、学び方を学んでいくことになるでしょう。２次２時のインタビュー活動、３時の対話活動へ発展させたのも工夫です。違う活動を通して、子どもたちの取材がさらに深まっていく様子が伺えました。メモを取る指導も取り入れています。取材をしっかりさせることで記述に向かう意欲も高めらています。何より素晴らしいことは、友達のことを深く知り合い、「学級目標」に近づけたという教師のとらえです。生活から発し、生活に返すことができた実践だと思いました。

## 3　竹内嘉奈子さん　「お話を作って、１年生に読み聞かせをしよう」〔物語文・構成〕

１０年次を迎える竹内さんは島の生活に憧れ、自分から島の小学校に転勤することを希望しました。責任感があり、何事も手を抜くことはしません。指導しなくてはならないことは徹底して身に付けさせるという気概に溢れたところがあります。時にそれが自分を追いつめることもあったようです。「ゆいの会」で自分の実践を語ったり、人の話を聞いたりする中でだんだん肩の力が抜けてきたように感じました。生活も共にする島での生活は想像以上のものだったでしょう。複式学級でどのように指導していくかを日々考えているので、彼女の実践を通してわたしたちもたくさんのことを学んでいます。

実践は創作文における構成の指導が中心です。同じ教室で生活している１年生に、２年生が物語を創作して読み聞かせるという言語活動を中核にしています。「はじめ」と「おわり」の絵を使い、「行って」「帰ってくる」という時間の経過で物語を構成すること、「中」の部分を工夫することを子どもたちに意識づけました。指導事項が焦点化、スリム化されています。

構成のはっきりした絵本の読み聞かせを取り入れたことも工夫の一つです。自分の文章を書くために読む活動を関連させているのです。毎日行っている読み聞かせが効果的に学習に生かされました。

これらの手立てを通しておもしろい物語文ができあがっています。指導していた２年生だけでなく、１年生にも「はじめ・中・おわり」が意識づけられたという意外な波及効果も見えた実践でした。

## ４　安河内　健二さん　「れいをあげてせつめいしよう～世界に４０冊食べ物へんしんブックを作ろう～」〔説明文・構成〕

今年新規採用となった安河内さんは、４年間の講師歴があります。情報教育、少人数担などの立場から教科指導や学級指導に関わってきました。いろんな学級に入った経験が、彼にはプラスに働いているようです。こんな子どもに育ってほしいという願いをしっかりもって、学級経営に取り組んでいます。講師時代から「ゆいの会」に参加しています。人の話をしっかり聞き、自分の力として蓄えてきました。今年は会報作りを担当していますが、その内容の的確さには驚かされるばかりです。

実践は「すがたをかえる大豆」の学習後に、自分たちも食物の変身を調べて説明文を書くという言語活動を中核にしています。構成に重点を置いているので、調べ学習でとまどわないよう教師があらかじめ用意した本に付箋を貼っています。また、調べたことをメモするワークシートも、子どもの実態に合わせて工夫しています。何に重きをおくかで教師の手立てを考え、工夫しているのです。構成の指導では、「すがたをかえる大豆」の学習を効果的に想起させ、文章全体を意識しながら構成表を書かせています。書くことに抵抗がある子どもへの配慮も丁寧です。安河内さんも価値目標の大切さを改めて実感しています。その思いは学習の様子を伝える学級通信にあふれています。また、年間計画を立てて重点的に指導していく力もついてきたと思います。

## ５　小林　恵子さん　「自分新聞を作ろう」〔紹介文・構成〕

５年目の溌剌とした先生です。どんな困難も乗り越えていこうとするバイタリティに溢れています。小林さんもいつも子ども目線です。子どもの思いを大切にした実践を心がけようとします。時につらいことがあっても、子どもといるとそれを忘れることができると話していました。１年間同学年をしましたが、子どもから信頼される教師に育っているように思います。

実践は「２分の１成人式」を視野に入れて「自分新聞」を作るという単元を構想しています。書くことが苦手という実態を踏まえ、社会科で学んだ「新聞作り」なら気軽に取り組めると考えたのでしょう。子どもたちにとって経験は財産です。教科の枠をこえて学びが生かされたとき、本当の力となります。今回は構成をメインにしているので、新聞を活用して構成について学び、自分の新聞のレイアウトを工夫する活動へつないでいます。１０歳になった自分を振り返り、周りの人の支えや自分のがんばりに気付かせています。「周囲の支え」についてはよく考えさせますが、「自分のがんばり」に目を向けさせているのは素晴らしいです。自分に自信がもてない子どもは友達のことも否定的に見てしまうという彼女なりの課題があったからでしょう。その上で「２０歳までにやりたいこと」「２０歳の自分へあてた手紙」と発展させているので、子どもたちに無理なく思考の流れができます。「２分の１成人式」のスピーチに生かされていたこともうなずけます。

## 6　山下恵子さん　「みんなに教えたい！守恒クラブ活動」〔紹介文・題材〕

勤続２９年の実力のある教師です。山下さんも先の研究会に入っていました。やはり同時期に辞め、本研究会の趣旨に真っ先に賛同してくれました。会のバックボーンとしてみんなに声をかけ、研究を広げてくれています。彼女は、学級だけがよくなってもだめだという考えが根本にあります。教師の同僚性をどのように高めていくかということを考え、学校全体にいろんな提案もしています。大変な学級を担任することが多く、全力で子どもたちに向かう姿は迫力があります。「子どもの実態から出発した授業作り」を目指しています。最近は特別支援教育の視点からの学級作り、授業作りを視野に入れ実践を積み重ねています。

今回の実践は、来年からクラブ活動が始まる３年生と学級の友達に自分のクラブを紹介する言語活動が中核になっています。相手意識・目的意識をはっきりさせて取材、選材をしています。一貫して相手意識をもたせていることがこの実践の価値だと思います。「送り手が伝えたいこと」「受け手が知りたいこと」という明確な視点をもたせることで、その後の学習もはっきりしてきます。相手意識を明確にもたせたことが子どもたちの生活に返っていることが伺えます。自分中心に考えがちなＡ君に他者を意識した発言や行動がみられたことです。相手の立場で考えることがいかに大切であるかを教えてくれた実践です。これが「生きて働く力」ではないでしょうか。

## 7　上野　智敬さん　「構成や表現を工夫して書こう」〔物語文・記述〕

２年目の上野さんは、真面目な性格で講師時代から熱心に参加していました。欠席もほとんどありません。自分の決めたことはきちんとやり遂げ、「ゆいの会」に対する気配りもできます。それはきっと学校でも同じでしょう。教室では子ども一人一人に目を配り、着実な実践を重ねていると思います。また、職員室でも気配りで同僚性を高めていると思います。「ゆいの会」で学ぶことを楽しみにしていることもわかります。子どもの成長をとらえて実践を語る姿に、だんだん自信をもってきたことが伺えます。

実践は物語文の記述に焦点を当てています。教科書教材の写真を使ってイメージをふくらませ、「自分の物語を作りたい」という関心・意欲を高めています。相手意識をはっきりもたせ、「読み手が読みたい」と思う物語にするために記述の工夫をしようとしています。子どもたちの目は「タイトル」と「書き出し」に向いたので、その部分を重点的に指導しているようです。多くを望まず確実に力を付けていくことを大切にしています。

## 8　小島　歩さん　「５－３いきいき大作戦！『後ろ黒板改造』提案」〔意見文・取材〕

小島さんは教師生活４年目です。控えめな性格で自分から話すことはあまりありません。自分はまだまだ勉強不足で指導の引き出しをたくさん作りたいと、みんなの話を熱心に聞いています。でも、水を向けられると、子どもに対する自分の思いを語り始めます。それは決して教師からの目線ではなく、子どもの立場に立った思いであることが分かりました。子ども自身に考えさせる場を作ることを

心がけていることも話の端々から伺えます。

教科書教材は「図書館改造提案」となっています。しかし、子どもたちが活動する「実の場」としては成立しにくいでしょう。学校図書館をあるクラスの意向で変えることは難しいからです。また、案だけでは子どもたちの活動意欲は失われてしまいます。「実の場」で実現されることが何より大切なのです。そこで、小島さんは「自分たちの学級をよりよくする」改造案に変えました。これなら実現可能です。アンケートを取り、「自分たちの教室を自分たちの手で改造したい」と一人一人に明確な課題意識をもたせ、取材活動へとつなぎました。この学習をていねいに行うことで、学習意欲が続いていくことがわかります。学習後も後ろ黒板を利用して学級の自治が高められている様子が報告されているからです。子どもたちの成長を確かなものとして感じ取っています。

## 9　北川尊士さん　「自分の考えを伝えよう」〔意見文・構成〕

勤続２４年のベテラン教師です。採用当時から「吉本理論」を学び、綿密に計画された授業作りをしてきました。本市に転勤してから先のトップダウンの研究会に入り、やはり辞めています。「ゆいの会」では事務局の仕事をしています。学級だけでなく研究や学校という大きな視野からいろいろな提案をします。彼のすばらしさはその学級経営にあります。荒れた学級を見事に落ち着いたクラスに変容させるのです。子ども一人一人とつながり、子ども同士をつなぎます。わたしたちはこれを「北川マジック」と呼んでいます。若い先生にぜひその極意を学んでほしいと思っています。

実践は、以前の教科書にもあった教材です。「平和のとりでを築く」を自分の意見文を書くための資料として読みます。従来の考え方からすると、「読みはこれでいいのか」と思われるでしょうが、「筆者の論理構造に気付き、文章構成を学ぶ」とスリム化しました。単元設定時から平和に関心をもたせ、自分の意見文を書くという活動目標をはっきりさせています。子どもたちが安易にとらえた平和をより強い主張にしていくために、教材文を資料として構成の立て方を学ばせています。まず、自分の文章の「わかりにくさ」に着目して、どうすれば相手に伝わる文章になるのかを構成という視点で考えさせました。その上で「論理をはっきりさせて構成を考えればよい」ということに気付かせ、学習を進めています。自分の考えをどのように発信すれば読み手に伝わるかという学び方を身に付ける学習になっています。